

『伊豆大島文学・紀行集』絵画編』を読む

エッセイスト 川口 祐二
三重県在住

【寄稿】待望の『絵画編』が出た。すばらしい出来あがりの一冊である。大島町の文化レベルの高さを示す。町の『宝物』として、長く緋(ひ)もとかれることを望みたい。それは、『絵画編』だけではなく、それ以前に出版された三冊(詩歌・小説・紀行記の三冊・二七三三頁)も合わせてのことである。

『絵画編』であつても、画集ではない。伊豆大島を訪れた画家七名の紀行記ほか日記などが集められた一冊だ。和田三造から始めて、坂本繁二郎、中村彝(つね)、村山槐多、有島生馬、足立源一郎、中川紀元、伊東深水、石井柏亭、長谷川利行、東郷青児、棟方志功、奥村土牛など、錚々たる画家の名が連なる。

巻頭の和田三造の傑作『南風』にまつわる一篇が、抜粋であるが面白い。坂本繁二郎の『島中一族の様』に親切で優しくて美人が多い。歌が上手。夏は涼しい。冬は暖い。生は、読み手に語りかけ

ている印象を与え、親しみがわく。多くの頁に配置された板画を見ながら読み進むのも楽しい。この人は、昭和九(一九三四)年から一三(一九三八)年まで、大島観光ホテル(今の大島小涌園)に勤めていたホテルマンであつた。大島の風俗習慣へのまなざしは、すこぶる温かい。板画によって大島を伝えた人でもある。

総頁五一六頁、上下二段組みの大冊を、通り一遍の読み方で感想を述べるのは、甚だ不遜のふるまいであろうが、少なくとも、「しま」に関心のある人には、必読の一冊として勧めたい。冒頭の六〇頁に余るカラー刷りの「絵画」の図録もよい。それにもまして、二八頁をついやして書かれた、あとがきともいふべき、「画家と画家を迎えた大島の足跡」を、開巻まず第一に読まれることだ。編者の四冊シリーズの編集にかけた情熱と苦勞に脱帽するはずである。いわば、伊豆大島に住む者の、やらねばならぬ使命感といったようなものが、行間から伝わってきて感動した。まさに、大島町の金字塔といえよう。

しかし、本巻で最も心打たれたのは、「大島」と題する、永田米太郎の六二頁にわたる一篇であつた。大作である。まさに庄巻といふべきか。「ですます」つまり敬体で記述されており、この一作は、読み手に語りかけ

川口祐二先生の略歴

1932年三重県に生まれる。
1989年三重県度会郡南勢町教員会事務局長
退職。在職中より漁村にかかわる実践運動を展開、いちばやく
漁村から合成洗剤をなくすことと提唱。著書多政あり
元三重大学客員教授。